HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『貝あはせ』注解
Author(s)	後藤, 康文
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 163, 67(右)-93(右)
Issue Date	2021-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.163.r67
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80817
Type	departmental bulletin paper
File Information	1005_bfhhs_163_r67.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『貝あはせ』注解

後藤康文

一 ――少将、子供の園へ――

【本文】（底本＝高松宮本）

長月の有明の月に誘はれて、蔵人の少将、指貫つきづきしく引き上げて、ただ一人、小舎人童ばかり具して、やがて朝霧もよく立ち隠しつべく隙(ひま)なげなるに、

「をかしからむ所の、開きたらむもがな」

といひて歩み行くに、木立をかしき家に、琴(きん)の声ほのかに聞ゆるに、いみじう嬉しくなりてめぐる。

門(かど)の脇など、「崩れやある」と見けれど、いみじく築地(ついぢ)などまたきに、なかなかわびしく、「いかなる人の、かく弾きゐたるならむ」と、わりなくゆかしけれど、すべき方もおぼえで、例の、声出ださせて、随身に歌はせ給ふ。

行く方も忘るるばかり朝ぼらけひきとどむめる琴（こと）の声かな

と歌はせて、まことにしばし、「内より人や」と心ときめきし給へど、さもあらぬは口惜しくて、歩み過ぎたれば、いと好ましげなる童べ、四五人ばかり走りちがひ、小舎人童、男（をのこ）など、をかしげなる小箱やうのものを捧げ、をかしき文袖の上にうち置きて、出で入る家あり。

【注解】

○**長月の有明の月**―名歌「今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな」（『古今集』恋四・素性）による文飾。○**つきづきしく**―冒頭の「有明の月」と同音の語を意図的に用いた言語遊戯。『逢坂越えぬ権の中納言』でも同様の趣向が見られる。○**具して**―「歩み行くに」に係る。○**やがて**―夜が明けるとすぐに朝霧が立ち込めて、主従二人の姿を隠すというのである。少将がすてきな女性を求めて、夜通し忍び歩きをしていたことがわかる表現。○**琴の声**―中に美女がいることを暗示する。だから、少将が「いみじう嬉しくな」るのである。物語の常套的設定。○**崩れやある**―『伊勢物語』第五段の「みそかなる所なれば、かどよりもえ入らで、わらはべの踏みあけたるついひぢの崩れより通ひけり」を想起させる書き方。○**随身**―先の記述「ただ一人、小舎人童ばかり具して」と一見矛盾する記述。お忍びの女漁りなのだから、お供が「ただ一人」に限られていたことは動かない。となれば、「小舎人童」のことを「随身」と書いたことになる。物語終局部（第五節）にも、少将のお供をする「例の随身」が登場する。○**行く方**―底本ほか「ゆきかた」。このままでは不自然。「ゆくかた」→「行方」→「ゆきかた」といった転写過程における表記の変容を想定し、本文を改めた。○**小箱**―底本ほか「こわらは」。また、三手文庫本等「こわりこ」。いずれも誤写によ

る転化本文としか考えられないため、「こは（八）こ（古）」→「こはらは（良八）」→「こわ（和）らは」の誤写過程を想定して、本文を改訂した。○**袖の上にうち置きて**―着物の片方の袖をもう片方の手で持ち、その上に手紙を置いて持ち運ぶ様。「をかしき文」に直接手で触れないための恭しい配慮である。

【現代語訳】

九月の有明の月に唆されて、蔵人の少将が、指貫（の裾）をちょうどよい具合にたくし上げて、（お供には）たった一人、小舎人童だけ（を）連れて、（夜が明けると）すぐに朝霧までもが折よく立ち込めて、（彼らの姿を引きつづき）隠してしまうことができるほど隙間なく見える中を、

「興趣をそそられるような所で（門が）開いている、そんな（お誂え向きの）屋敷があれば（よいが）なあ」と（何とも虫のよいことを）いって（構わず）歩いて行くと、（庭の）木立が風情ある屋敷（の所）で、（七弦の）琴の音がほのかに聞えるので、（少将は）とても嬉しくなって、（その屋敷の周囲を）一巡りする。

門の近くなんかに、（あの『伊勢物語』の話のように）「（通い路にできる築地の）崩れはあるか」と点検したけれど、土塀などもたいそう完全なので、かえって切なくて、「（いったい）どんな（美しい）方が、このように（趣深く琴を）奏でているのだろうか」と、無性に知りたいけれど、どうしてよいかも（即座には）わからずに、（とりあえず）いつものごとく、声を出させて随身に（歌を）朗詠させなさる。

（これから）出向く所も（思わず）忘れるほど、（この）夜明け方に（わざわざ）お弾きになって、（あたかも私を）引きとどめなさるかのような（すばらしい）琴の音色ですね。

と朗詠させて、しばらく（の間）本気で、「（この歌に反応して、屋敷の）内から誰か（出て来ないだろうか）」とわくわくなさったけれど、そうはならず（期待を裏切られた）のは残念で、（諦めて）歩き過ぎたところ、たいへん感じのよい女童たちが、四五人ほど（あわただしく）走ってすれ違い、（また、それとは対照的に、）小舎人童や（使用人の）男などが、見た目に風情のある小箱状のものを（高々と）捧げ（持ち）、趣深い手紙を（渡した）袖の上にさっと置いて、（粛然と）出入りする屋敷がある。

【余説】

『枕草子』「女一人住む所は」の段に、

女一人住む所は、いたくあばれて、築地なども、またからず、池などある所も、水草ゐ、庭なども、蓬にしげりなどこそせねども、所々、砂子の中より青き草うち見え、さびしげなるこそあはれなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いたくかため、きはぎはしきは、いとうたてこそおぼゆれ。

と記されているように、築地（土塀）が「またき」、すなわち完全な状態であるのは、防犯上はともかく、そこが風流な世界とは無縁な場所であることを示唆している。もちろん、蔵人の少将が遭遇した「木立をかしき家」は「女一人住む所」などではない。だがそこに、「築地」の「崩れ」一つでもあったとすれば、爾後の意表を突いた展開は導けなかったわけであるから、この点に作者のしたたかな趣向を見て取ることができる。

なお、本節最後で「いと好ましげなる童べ、四五人ばかり走りちがひ」とあるのは継子の姫君方の女童たちの、「小舎人童、男など、をかしげなる小箱やうのものを捧げ、をかしき文袖の上にうち置きて、出で入る」とあるのは正妻

腹の姫君方の使用人たちの様子を、それぞれ描き分けたものとみられる。

二　――少将、姫君を垣間見る――

【本文】

「何わざするならむ」とゆかしくて、人目見はかりて、やをら這ひ入りて、いみじく繁き薄の中に立てるに、八九ばかりなる女子（をんなご）の、いとをかしげなる、薄色の袙、紅梅など乱れ着たる、小さき貝を瑠璃の壺に入れて、あなたより走るさまの、あわたたしげなるを、「をかし」と見給ふに、直衣の袖を見て、

「ここに人こそあれ」

と何心もなくいふに、わびしくなりて、

「あなかまよ。聞ゆべきことありて、いとしのびて参り来たる人ぞ。と寄り給へ」

といへば、

「明日のこと思ひ侍るに、今よりいとまなくて、そそき侍（はむべ）るぞ」

とさへづりかけて、去ぬべく見ゆめり。をかしければ、

「何ごとの、さいそがしくはおぼさるるぞ。まろをだにおぼさむとあらば、いみじうをかしきことも、人は得てむかし」

といへば、名残りなく立ち止まりて、

「この姫君と、上の御方の姫君と、『貝あはせさせ給はむ』とて、月ごろいみじく集めさせ給ふに、あなたの御方は、大輔の君、侍従の君、いみじくもとめさせ給ふなり。まろが御前は、ただ若君一ところにて、いみじくわりなくおぼゆれば、ただ今も『姉君の御もとに人やらむ』とて。まかりなむ」

といへば、

「その姫君たちの、うちとけ給ひたらむ、格子のはざまなどにて見せ給へ」

といへば、

「人に語り給はば、人もこそのたまへ」

とおづれば、

「ものぐるほし。まろは、さらにものいはぬ人ぞよ。ただ、人に勝たせ奉らむ、勝たせ奉らじは、心ぞよ。いかなるにか、貝どもの主」

とのたまへば、よろづおほえで、

「さらば、帰り給ふなよ。隠れ作りて、据ゑ奉らむ。人の起きぬ前(さき)に、いざ給へ」

とて、西の妻戸に、屏風押し畳み寄せたる所に据ゑ置くを、ひがひがしく、やうやうなりゆくを、

「幼き子を頼みて、見もつけられたらば、よしなかるべきわざぞかし」

など思ひつつ、はざまよりのぞけば、十四五ばかりの子ども見えて、いと若くきびはなるかぎり十二三ばかり、ありつる童のやうなる子どもなど、手ごとに小箱に入れ、ものの蓋に入れなどして、持ちちがひさわぐ中に、母屋の簾に添へたる几帳のつまうち上げて、さし出でたる人、「わづかに十三ばかりにや」と見えて、額髪のかかりたるほどより

はじめて、この世のものとも見えずうつくしきに、萩襲の織物の袿、紫苑色など押し重ねたる、頬杖をつきて、いとものなげかしげなる。

【注解】

○あなかまよ―底本ほか「かまよ」。三手文庫本等により「あな」の二文字を補った。**○瑠璃の壺**―『枕草子』が「うつくしきもの」の最後に挙げる。ガラスであれば中身が透けて見える。**○と寄り給へ**―「と寄る」は、暫時立ち寄るの意を表す動詞で、「白波の立ちながらだに長門なる豊浦の里のと寄られよかし」（『後拾遺集』雑六・能因法師）に拠る表現。この歌に用いられた「白波」の語は、本作のキーワードとなる。**○そそき侍るぞ」と**―底本ほか「そゝきはむへるを」。三手文庫本等により改めた。「そと（曽止）」の二文字が「を（遠）」一文字に写し誤られたものであろう。**○さへづりかけて**―ここでの「さへづりかく」は、それどころではない女童が少将に早口で応答する様を表していて効果的である。**○人は得てむかし**―「人は」には「くは」＝「加」の対立異文があるが、これは「人」→「く（久）」の誤写で、底本等の本文がもとの形と考えられる。「人」は広く他者の意。ここでは女童を指す対称の人代名詞「あなた」とも取れなくはないけれど、後文における「人」の用法との整合性に鑑みて、結局はその主人である姫君を指したものとみる。なお、少将のこの〝利他〟的発言は、先に指摘した「と寄り給へ」という表現のことさらな選択と相俟って、彼が観音菩薩の化身へと変貌していく巧妙な伏線と見なすことができる。**○上の御方**―底本以下主要諸本「うゑとの御かた」。「と」は衍字とみて削除した。「上の」に「上（東）の」傍記が施され、それが「上と（東）の」と誤って本文化した過程が想定できる。「上の御方」はこの単位で奥方様の意。なお、この敵役の姫君は、のちに「東の御方」と呼

ばれているので、理論的には、「東の」→「東の（上）」→「上と（東）の」の〝別解〟も成り立ちそうだが、「東の御方の姫君」自体がやや不自然な呼称であるうえ、正妻腹の姫君という重要な意味が捨象されてしまうのでよくない。○**貝あはせさせ**―底本ほか「かいあはせさせ」。もと「せゝさせ」と表記されていた本文から踊り字が脱落した形であるのは明らか。ゆえに、三手文庫本等によりこれを補った。○**侍従の君**―底本「しゝうの君とかいあはせゝさせ給はんとて」。主要諸本同様であるが、圏点部本文は、「上の御方の姫君」と「侍従の君」との目移りに起因する（約一行分）の重複書写と推断されるため、削除する措置を取った。○**人もこそのたまへ**―底本「は（本ママ）ゝもこそのたまへ」。諸本同じ。しかし、そのまま「母もこそのたまへ」では文意が釈然としない。そこで、「はゝ」はもともと漢字「人」であったが、それが直前の「はゝ」を繰り返す二字分の踊り字「〳〵」に誤写され、さらに「はゝ〳〵」が「はゝはゝ」と表記されるに至ったものと考えた。あなたがここで見聞したことを他の人に口外なさったら、その方がまた誰かに漏らすかもしれず、そうしたかたちで姫君の噂が広まるのは困る、という文脈。○**貝どもの主**―ここは本作中最大の難解箇所で、底本表記は「ひとものふち（本ママ）」。「ゝひとものぬし（奴志）」→「・ひとものふち（婦知）」の転化を想定して、仮に「貝どもの主」＝「（さまざまな）貝の所有者」の意に解いてみたが、なお後考に俟ちたい。○**西の妻戸に、屏風押し畳み寄せたる所に**―西の対の西側の妻戸に面した簀子に、何らかの遮蔽物を置くなどして少将の居場所としたのである。この位置と条件であれば、人に気づかれにくく、かつ、妻戸の隙間から室内がよく見通せる。なお、このあたりの叙述、『源氏物語』野分巻で夕霧が紫の上の姿を目撃する場面「大臣は、姫君の御方におはしますほどに、中将の君参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸の開きたる隙を何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて音もせで見る。御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐ

たまへる人、ものに紛るべくもあらず」云々を想起させる。○**ひがひがしく**―底本ほか数本「ひろ〳〵しく」。三手文庫本等「ひる〳〵しく」。「ろ（呂）」「る（留）」は「か（可）」の誤写とみるのが妥当であり、宮内庁書陵部本等によって本文を改めた。○**思ひつつ**―底本ほか「おもひ〳〵」に作るが、「思ひ思ひ」を「思いながら」の意に解することは断じてできない。踊り字「〳〵」を「つ（川）丶」の誤写とみて改訂したゆえんである。ただし、三手文庫本等の表記「思〳〵」であれば、「思ふ思ふ」＝「思うものの」と読めて、それはそれで解釈が成立する可能性がある。参考「なごりなう移ろふ心のいと軽きぞやとは思ふ思ふ、なほ心げさうは進みて」（『源氏物語』真木柱巻）「みづからの心にだにかなひがたきをと思ふ思ふ、さもおはせなむと思ひなるやうのあれば」（同総角巻）など。○**十四五ばかり**―「子ども」の人数。○**など、手ごとに**―底本以下主要諸本「なとしてことに」。圏点を付した「し」の字は、下の「入れなどして」に惑わされた明らかな衍字と判断されるため、今これを削除した。ちなみに底本では、「なとして」の同一文字列が、「なと」（行末）と「して」（行頭）に分割されるまったく同一の形態で、二行つづけて書写されている。○**中に**―底本ほか「中」。ここは格助詞「に」の下接が望まれる文脈なので、三手文庫本等によりこれを補った。○**わづかに十三ばかり**―「わづかに」は、かろうじての意。当時、子供と大人の境界はおよそ十三歳ごろと考えられていた。少将の目には、姫君が性愛の対象たりうる最低限の年齢に見えたというのである。○**いとものなげかしげなる**―「なり」ではなく諸本で連体形「なる」とあるのは、厳密にいえばここで終止するのではなく、「～のは」と下に係って行く筆法だからである。便宜上句点で区切った。○**頬杖をつきて**―「頬杖」をつく姿勢は、悩みを抱えている時のしぐさ。

【現代語訳】

（少将は、）「（いったい）どんなことをするのだろうか」と知りたくて、人の出入りが途切れた隙を見て、そっと（邸内に）潜入して、（前栽の）たいそう生い繁った薄の中に（身を隠して）立っていると、八九歳ほどの女の子で、とても愛らしい、（そして、）薄紫色の袷や紅梅（色の表着）などをしどけなく着ている子が、小さい貝（殻）を瑠璃（製）の壺に入れて、向こう（の方）から走（って来）る様子が、（何やら）忙しそうなのを、「おもしろい」と（思って）ご覧になっていると、（その子がふと、少将の）直衣の袖を見て、

「ここに（誰か）人がいますよ」

と無邪気にいうので、（少将は）弱ってしまって、

「しっ、静かに。（私は、あなたに）申し上げるべきことがあって、極秘裏に参上した者です。ちょっと（こちらに）お立ちよりください」

と（咄嗟に）話しかけたところ、（その子は、）

「明日の行事を考えますと、今から時間がなくて、（準備に）追われているのです」

と早口でことばを返して、（そのまま）立ち去ること必定に見える様子である。（少将は）興味をそそられたので、

「（いったい）どんな行事が（あるので）、そんなに忙しくお思いになられるのですか。（あなたが、神仏ならぬこの）私なりと（信じて）お思いになろうということであるならば、たいそう趣深いことも、そのお方（すなわちあなたのご主人）は、きっと手に入れることになるでしょうよ」

というと、（女童は）ぴたりと足を止めて、

「（実は、）こちらの姫君と、奥方様の姫君とが、『貝あはせをいたしましょう』ということで、数か月来たいそう（貝を）お集めあそばしているのですが、あちらの姫君側は、大輔の君や侍従の君（といった強かな女房たち）が、全力を挙げて探し求めさせなさっているらしいのです。（それに引き換え、）私の（お仕えする）姫君は（というと）、（お頼りになれるのが、弟君である）若君たったお一人でして、（その差が）ひどく理不尽に思われますので、（私たちもできるかぎりの手を尽すべく、）ちょうど今しがたも、『（姫君の）お姉さまがおいでの所へ使者を遣わそう』と思いまして。（それでは）失礼します」

というので、

「（では、）その姫君たちが、くつろいでいらっしゃるであろうご様子を、格子の隙間などで（私に）お見せください」

というと、

「（そんな軽率なまねをして、あなたがここでご覧になったことを）人様にお話しなさったならば、その方が（また別のどなたかに）お話しになっ（て、姫君方のお噂が世間に広まっ）たら大変です」

と恐れるので、

「ばかばかしい。私は、決して（人に）喋ったりしない（口の固い）人間なのですよ。もっぱら、ご主人に勝たせてさしあげよう、勝たせてさしあげまい（を決めるの）は、（この私の）気持ちにほかならないのですよ。（といいますのも、）奇遇なことに、（私は、）さまざまな貝の持ち主なのです」

とおっしゃると、（女童は）すべてを忘れて、

「それならば、どうかお帰りなさいますな。（今すぐ）物陰をこさえて、（そこにあなたを）居させ申し上げましょう。

（ほかの）人が起きない前に、さあこちらにいらして」

といって、（姫君の居所である西の対の）西側の妻戸（のある簀子）に、（室内では、ちょうど）屏風を押し畳んで（端に）寄せてある（見通しのよい）所に、（遮蔽物などを用意して、少将を）座らせて立ち去ったのだが、（何とも）おかしなぐあいに、だんだんとなっていくので、（少将は、）

「（あんな）幼い子供を頼りにして、もし（誰かに）見つけられでもしたなら、（われながら、まったく）割に合わない所業だよ」

と思いながらも、（妻戸の）隙間から（中を）覗くと、（南廂に）十四五人ほどの子供たちが（いるのが）見えて、（そのうちの）とても若くて年端もいかない者ばかり十二三人ほど、先ほどの女童のような子供たちなどが、手に手に（貝を）小箱に入れたり、何かの蓋に入れたりなどして、持って忙しく動き回る（その）中に、母屋の簾に添えてある几帳の端をさっと上げて、（廂の間の方へ）顔を覗かせている人が（いて、その人は、）「かろうじて十三歳くらいだろうか」と見えて、額髪が垂れ下がっているありさまをはじめとして、（まるで）この世の人とも思えないほど可憐なのだが、萩襲の織物の袿（の上）に、紫苑色（の表着）などをきっちりと重ねて（着て）いる（その人は）、頬杖をついて、ひどく何かを嘆いている様子である。

【余説】

【注解】ですでに述べたが、

①「と寄り給へ」が、能因の一首「白波の立ちながらだに長門なる豊浦の里のと寄られよかし」に拠っている点。

②女童に対する発言「まろをだにおぼさむとあらば、いみじうをかしきことも、人は得てむかし」に、信仰と利益の構図が読み取れる点。

からして、本作で観音菩薩の化身となることを運命づけられた蔵人の少将像が、この段階で早くも萌していて注意される。

また、子供の生態活写の巧みさはこの作品の大きな特徴であるが、ここでも「八九ばかりなる女子」の幼さ、純真さが、「何心もなくいふに」「さへづりかけて」「名残りなく立ち止まりて」「おづれば」「よろづおほえで」等々冴えわたる筆致で描出されている。

三　――少将、方人となる――

【本文】

「何ごとならむ」と「心苦し」と見れば、十ばかりなる男(をのこ)の、朽葉の狩衣、二藍の指貫しどけなく着たる、同じやうなる童と、硯の箱よりは見劣りなる紫檀の箱の、いとをかしげなるに、えならぬ貝どもを入れて持て寄る。見するままに、

「思ひ寄らぬくまなくこそ。承香殿の御方などに参りて聞えさせつれば、これをぞもとめえて侍りつれど、侍従の君の語り侍りつるは、大輔の君は、藤壺の御方より、いみじく多く給はりにけり。すべて残るくまなくいみじげなるを、『いかにせさせ給はむずらむ』と、道のままも思ひまうで来つる」

とて、顔もつと赤くなりていひゐたるに、いとど姫君も心細くなりて、

「なかなかなることをいひはじめてけるかな。いとかくは思はざりしを。ことごとしくこそもとめ給ふなれ」

とのたまふに、

「などかもとめ給ふまじき。『上は、内大臣殿の上の御もとまでぞ、乞ひに奉り給ふ』とこそはいひしか。これにつけても、母のおはせましかば、あはれ、かくは」

とて、涙も落としつべきけしきども、「をかし」と見るほどに、このありつる童、

「東の御方、渡らせ給ふ。それ、隠させ給へ」

といへば、塗り籠めたる所にみな取り置きつれば、つれなくてゐたるに、「はじめの君よりは少しおとなびてや」と見ゆる人、山吹、紅梅、薄朽葉、あはひよからず着ふくだみて、髪いとこはごはしげにて、丈に少し足らぬなるべし。

「こよなくおくれたる」と見ゆ。

「若君の持ておはしつらむは、など見えぬ。『かねてもとめなどはすまじ』とたゆめ給ふに、すかされ奉りて、まろはつゆこそもとめ侍らずなりにけれ」

と、

「いとくやしく。少し、さりぬべからむものは分け取らせ給へ」

などいふさま、いみじくしたり顔なるに、にくくなりて、「いかで、こなたを勝たせてしがな」と、そぞろに思ひなりぬ。この君、

「ここにも、ほかまではもとめ侍らぬものを。若君は何をかは」

といらへてゐたるさま、うつくし。うち見まはして渡りぬ。

【注解】

○**男の**―底本「おのこに」。諸本の本文も同様だが、「に（爾）」は「の（乃）」のよくある誤写とみて改訂されなければならない。いわゆる同格の格助詞「の」である。○**童と**―底本以下現存諸本「わらはに」。格助詞「に」は同「と」の間違い。「と（止）」→「に（二）」。ここは、「十ばかりなる男」が同じ年ごろの「童と」一緒に、という文脈なのである。○**承香殿**―前出の「姉君」とは別の縁者で、おそらく女御であろう。○**髪いとこはごはしげにて**―「こはごはしげ」は、底本以下諸本に「うつくしけ」とあるが、これでは文意がうまく通らない。「この世のものとも見え」ない継子の姫君と比較して「こよなくおくれたる」「東の御方」であってみれば、その頭髪だけがよりによって「いとうつくしげ」であろうはずがない。よって、「こ（已）は（八／波）〳〵しけ」→「う（宇）つ（川／徒）く（久）しけ」の誤写が生じたものとみて、本文を改訂した。形容動詞「こはごはしげなり」はこの場合、「東の御方」の「髪」が剛毛かつ縮毛である様を表現している。○**まろ**―底本以下諸本「よろつ」で意味不明。ここは、一人称の代名詞「ま（末）ろ」が「よ（与）ろ」に誤られた結果、転化本文「よろつ」が生成れたと判断すべきところ。ゆえに、本文を改訂した。○**そろに思ひなりぬ**―継子の姫君を性愛の対象として見ていた少将が、義憤に駆られたことで純粋な「方人」＝援助者へと変貌するのである。

【現代語訳】

「（はて）何ごと（を憂えているの）だろうか」と、「気の毒だ」と思って見（てい）ると、（弟の若君らしき、年のころ）十歳ほどの男の子で、朽葉色の狩衣に二藍の指貫を乱れ気味に着た子が、同年輩の童と（一緒に）、硯の箱よりは小さめの紫檀の箱で、たいそう高級そうなのに、喩えようもないくらいすばらしいとりどりの貝を入れて、（姫君のもとに）持って近寄る。（そして、それを）見せるやいなや、

「思い当たる所はもうすべて（当たりました）。承香殿（の女御）様の御座所などに参上して（事情をお話し）申し上げさせたところ、（何とか）これを入手することができたのですが、（折しも出くわした）侍従の君が（得意げに）話して聞かせましたのは、大輔の君は、藤壺（の女御）様の御許から、とてもたくさん（の貝を、）首尾よく頂戴したとの情報です。（とにかくあちらは、）一箇所たりも探し残す所がなく、ものすごい（勢いで貝を収集し尽くしている）様子ですので、『（お姉様は、いったい）どう（太刀打ち）なさるおつもりでいらっしゃるのだろうか』と、（帰りの）道すがらも（そればかりを）案じ、（その足でこちらへ）参上したしだいです」

といって、顔も（上気して）急に赤くなって、座って報告するので、ますます姫君も心細くなって、

「なまじよせばよかったことをいい出してしまったものですわ。まったくここまで（の事態になろうと）は想像もしていませんでした。（あちらは、）大がかりに（貝を）探し求めていらっしゃるという話ですね」

とおっしゃると、

「（あの方のご性格からして、）どうして（派手に）お探しにならないはずがありましょうか。（侍従の君は私に、）『北の方様は、内大臣殿の奥様の御許にまで、（貝を）いただくために使者を参上させなさった』と明言しました。これ

（を思う）につけても、（私たちの）お母様が生きておいでしたら、ああ、このように（惨めな目には）は（遭わずに済んだでしょうに）」

といって、今にも涙を零しそうな姉弟の様子を、（少将が）「かわいい」と（思って）見ているうちに、この先刻の女童が、

「東の（対の）姫様が、（こちらへ）お出でなさいます。それを、（早く）お隠しなさいませ」

といったので、（急いで）塗り籠めてある（収納）場所に全部しまったので、（姉弟は）何ごともなかったかのような態で座っていると、（現れたのは）「はじめの姫君よりは多少年長であろうか」と見える人（で）、山吹襲（に）、紅梅襲、（さらには）薄朽葉襲を、配色もよくなく着膨れて、髪（の毛）は（太くて縮れているため）ひどくごわごわした感じで、（長さも）背丈に少し足らないに違いない。（こちらの姫君に比べると）「格段に劣っている」と見える。（その姫君が、）

「若君が（今しがた）持っていらしたのは、なぜ見当たらないのかしら。（あなたが）『前もって（貝を）探し求めなどするのはよしましょう』と油断させなさったのに、（すっかり）騙され申し上げて、私は（貝を）一つも手に入れずじまいになってしまいました」

と（いい、さらに）、

「（それが）ひどく悔やまれて（ならないのです）。（だから、ほんの）少し（だけ）、良さそうなものは（私にも）分け与えてくださいませ」

などという様子が、（ことばとは裏腹に）はなはだ得意顔なので、（少将は、急に）嫌悪の情に駆られて、「どうにかし

て、こちら（の姫君）を勝たせられたらなあ」と、無意識のうちに思うようになった。（異母姉の理不尽な発言を受けて、）こちらの姫君が、

「私だって、（ことさら）外部にまでは（貝の）収集を依頼しておりませんのに。若君が（いったい）何を（持って来ましょうか。そんな事実はありません）」

とことばを返して座っている様子は、可憐である。（東の対の姫君は、あたりを）ざっと見回して、（その場を）引きあげた。

【余説】

ここでの敵役＝「東の御方」の描かれ方は絶妙の一言に尽きよう。容姿や服装のセンスにおいて「こよなくおくれたる」様子もさることながら、「うち見まはして渡りぬ」にとどめをさすふてぶてしい性格の描写は出色である。少将のみならず、享受者もまた「いかで、こなたを勝たせてしがな」という心境になること請け合いといえる。

その一方で、継子の姫君も決して他者のいいなりになるか弱い人物ではないことがわかる。「貝あはせ」を提案したことに対して「いとかくは思はざりしを」と後悔しつつも、異母姉の理不尽な要求を、「ここにも、ほかまではもとめ侍らぬものを。若君は何をかは」ときっぱり撥ねつけている気丈さに注意。

四　――少将、観音の化身となる――

【本文】

この、ありつるやうなる童、三四人ばかり連れて、

「わが母の常に読み給ひし観音経、わが御前負けさせ奉り給ふな」

など、ただこのゐたる戸のもとにしも向きて念じあへる顔、をかしけれど、「ありつる童やいひ出でむ」と思ひゐたるに、立ち走りてあなたに去ぬ。いと細き声にて、

かひなしと何なげくらむ白波も君がかたには心寄せてむ

といひたるを、さすがに耳とく聞きつけて、

「今、歌妙に。聞き給ひつや。」「これは誰(た)がいふべきぞ」「観音の出で給ひたるなり」「うれしのわざや。姫君の御前に聞えむ」

といひて、さいひがてら、恐ろしくやありけむ、連れて走り入りぬ。

「ようなきことをいひて、このわたりをや見あらはさむ」と胸つぶれて、さすがに思ひゐたれど、ただいとあわたたしく、

「かうかう、念じつれば、仏ののたまひつる」

と語れば、「いとうれし」と思ひたる声にて、

「まことかはとよ。恐ろしきまでこそおぼゆれ」

とて、頬杖つきやみて、うち赤みたるまみ、いみじくうつくしげなり。

「いかにぞ。この組入（くみいれ）の上よりふと物の落ちたらば、まことの仏の御徳とこそは思はめ」などいひあへるは、をかし。

【注解】

○**ありつるやうなる童**―先刻の女童と同じ年恰好の子供。「ありつる童」は含まれない。○**わが母の常に読み給ひし観音経**―「わが母」はこのように祈願した女童（たち）の母親。「常に読み給ひし」といういわゆる過去の助動詞「き」の使用は、この子（たち）の母もまた故人であることを暗示している。○**給ふな**―底本「給な」。諸本異同はないが、このままでは連絡が不自然であり、引用の格助詞「と」または副助詞「など」の脱落を想定してしかるべきところ。ここでは、下に「念じあへる」とある点に鑑み、元来「給ななど」とあった本文が、下の「ただ」の草体と紛れて「など」の二文字を落としたと考えて、これを補った。「給なゝと（止）たゝ（多）ゝ」↓「給な・・たゝ」。○**白波も**―「白波」は観音ときわめて関係の深い語で、すでに述べたように本作中で特別な意味を持つ。と同時に、「白波」は歌合や物合における「方人」の比喩にもなっている。○**といひたるを**―底本ほか「といふたるを」。「というたるを」とも解ける。○**さすがに耳とく聞きつけて**―観音になりすました少将の歌がいくら「いと細き声」で唱えられたとはいえ、そこはやはり鋭敏な聴覚で聞き取って、の意。女童たちは、祈願の効験に神経を集中したのである。○**歌妙に**―底本ほか「かた人に」。三手文庫本等「かたへに」の対立異文もあるが、いずれも不審。よって、「う（宇）たゝへに」↓「か（可）た・へに」↓「かた人に」の誤写とみて、本文を改めた。歌が霊妙に。○**見あらはさむ**―底本「みあらさむ」。他の諸本

によって「は」一字の欠落を補った。○**かうかう**―具体的には、少将＝観音の「かひなしと」歌を指す。女童たちの祈願内容ではない。○**仏ののたまひつる**―底本以下主要諸本「仏の給つる」。しかし、主語「仏」の下には、文末に連体形を要求する主格の格助詞「の」があるべきだろう。ゆえに、踊り字「ゝ」の脱落を想定して、李花亭文庫本等一部末流伝本と同形の本文に改訂した。「仏の〻給」→「仏の・給」。○**頬杖つきやみて**―姫君の心が晴れたことを象徴する表現。

【現代語訳】

（すると今度は、）こちらの、先刻の（子と同じ）ような（年恰好の）女童（たち）が、三四人ほど連れ立って、

「私のお母様がいつも読んでいらした観音経様、（どうか）私の御主人様を負けさせ申し上げなさいますな」

などと、あろうことか、まさにこの（少将が）座っている（妻）戸の所に向かって口々に祈願している顔は、かわいらしいけれど、「さっきの女の子が（私のことを）暴露するのではあるまいか」と（不安に）思ってじっとしていたところ、（あの子は気づきもせずに、居場所を）立つや、走って向こうの方へと姿を消した。（そこで少将は、観音菩薩になりすましたつもりか、）たいそう小さな声で、

貝がないとどうして嘆いているのでしょうか。（海の）白波もあなた（方）の（いる干）潟に（貝もろとも）きっと打ち寄せることでしょう。―甲斐がないとどうして嘆いているのでしょうか。白波（の間から現れる観音菩薩）も、あなた（方）の側にきっと味方することでしょう。

といったのを、（聞えるか聞こえないかの音量だった）とはいえ、（女童たちは、この歌を）鋭敏な耳で（しっかりと）

聞き取って、

「（たった）今、歌が（不思議なほど）すばらしく（聞えました）。（皆さん）お聞きになりましたか」「これは（いったい）どなたがいうにふさわしい（歌）でしょうか」「（祈願の甲斐あって）観音様が現れなさったのです」「うれしいことですわ。（さっそく）姫君様にご報告申し上げましょう」

といって、そういいながらも、（さすがに）恐ろしかったのだろうか、（女童たちは）連れ立って（母屋に）駆け込んだ。

（少将は、）「（ついつい）無用なことをいって（しまって）、（ほんとうに観音が示現したのかと）このあたりを見て確かめるのではなかろうか」とはらはらして、よせばよかったと思ってじっとしていた（のだ）けれど、（女童たちは）ただもう慌ただしく、

「かくかくしかじかと、（私たちがお祈りしたところ、観音）仏様が（歌で）おっしゃいました」

と（姫君に）語ったところ、（姫君は、）「ほんとうにうれしい」と思っている（のが如実にわかる）声で、

「信じてよいことなのかしら。怖くなるくらい（ありがたく）思われます」

といって、頬杖をつくのをやめて、（感涙で）急に赤みが差した目もとが、ことのほか可憐な印象である。

「（さて）どうでしょうか。この（お部屋の）組入（天井）の上から、不意に（欲しい）物が落ち（て来）たならば、ほんとうの（観音）仏様のご加護と思いましょうよ」

などと（口々に）いいあっているのは、おもしろい。

【余説】

「ありつるやうなる童」の中に「ありつる童」が含まれると取るなら、少将と取引をした女童の策略家的側面が前景化し、そのしたたかさが際立つことになるが、そうした解釈にはそもそも本文読解上無理がある。それが証拠に、「ありつる童」は少将の心配をよそに、「ありつるやうなる童」たちの挙動を感知しないまま彼らより先に「立ち走りてあなた」へと退場しているではないか。本作が活き活きと描き出す子供たちは、皆どこまでも純粋にして無垢な存在なのである。

五　――少将、亡き母となる――

【本文】

「とく帰りて、いかでこれを勝たせばや」と思へど、昼は出づべき方もなければ、すずろによく見暮らして、夕霧に立ち隠れて紛れ出でてぞ、えならぬ洲浜の三尺ばかりなるを、うつほに作りて、いみじき小箱を据ゑて、色々の貝をいみじく多く入れて、上には銀金（しろがねこがね）の蛤、うつせ貝などを、ひまなく蒔かせて、手はいと小さくて、

白波に心を寄せて立ち寄らばかひなきならぬ心寄せなむ

とて、引き結びつけて、例の随身に持たせて、まだ暁に、門（かど）のわたりをたたずめば、昨日の子しも走る。うれしくて、

「かうぞ。はかり聞えぬよ」

とて、懐よりをかしき小箱を取らせて、

「誰がともなくて、差し置かせて来給へよ。さて、今日のありさまも見せ給へよ。さらばまたまたも」
といへば、いみじくよろこびて、ただ、
「ありし戸口、そこはまして今日は人もやあらじ」
とて、入りぬ。洲浜、南の高欄に置かせて、這ひ入りぬ。
やをら見とほし給へば、ただ同じほどなる童べども、二十人ばかり装束きて、格子上げそそくめり。この洲浜を見つけて、
「あやしく。誰がしたるぞ、誰がしたるぞ」
といへば、
「さるべき人こそなけれ」「思ひ得つ。この、昨日の仏のし給へるなめり」「あはれにおはしけるかな」
とよろこびさわぐさまの、いとものぐるほしければ、いとをかしくて、見ゐ給へり、とや。

【注解】

○夕霧に立ち隠れて―本作冒頭の「朝霧もよく立ち隠しつべく」と呼応する表現。**○三尺ばかり**―底本以下主要諸本「み（三）まはかり」。「みまかり」等の異文もあるが、すべて意味不明で問題にならない。「みま」はもと漢字表記「三尺」であったが、「尺」が仮名の「ま（末）」に誤写されたことで、「三まはかり」→「みまはかり」の転化本文が生まれたとみて間違いあるまい。参考「黒塗の箱の九寸ばかりなるが、深さは三寸ばかりにて」（『落窪物語』巻二）「平なる板の一尺ばかりなるが、広さ一寸ばかりなるを」（『宇治拾遺物語』巻二）など。「三尺」すなわち九十センチ余りの洲

浜であれば、随身一人に持ち運ばせることが可能であろうし、姫君への支援品としても適切な寸法といえよう。○**かうぞ。はかり聞えぬよ**―ほら、このとおり。あなたを欺き申し上げはしませんよ、の意。○**をかしき小箱を取らせて**―少将がやおら懐から取り出したこの「小箱」は、女童を信用させて今日もまた便宜を図ってもらうための贈物で、いわば〝賄賂〟である。○**ありさまも**―底本ほか「あちさまの」。「の（農）」は「も（裳）」の誤りとみて改めた。「も」は添加の係助詞。○**さらばまたまたも**―そうしたら、またプレゼントがもらえるよ、の意。○**童べ**―底本以下諸本すべて「わかき人」に作る。しかし、この本文では「若き人」＝「若い女房」の意にしか解釈できず不可。すなわち、「わかき（可支）人」なる現存本文は、「わらはへ（良者部）」の誤写とみなければならないのである。

【現代語訳】

（少将は、）「（一刻も）早く帰って、何とかしてこの人を勝たせ（るべく準備をし）たいものだ」と思うけれど、（明るい）昼間はうまく脱出できる方法とてないので、心の趣くままに日が暮れるまでは垣間見に専念して、夕霧（が立ち込めてきたの）に隠れてこっそりと（屋敷を）出てようやく、極上の洲浜で（全長）三尺ほどであるのを（用意させ）、（内部を）空洞に仕立てて、（そこに）すてきな小箱を固定して、（中に）色とりどりの貝をたいそうたくさん入れる。そして、（洲浜の）上には銀製金製の蛤やうつせ貝などを、びっしりと蒔かせて、（最後に）文字はとても小さくて、

白波（の間から現れる観音菩薩）に思いをかけて（波が立ってみぎわに打ち寄せるように）立ち寄るならば、甲斐（すなわち貝）がないわけはありません。（ですから、是非とも）思いをかけてほしいものです。

と書いて、（洲浜に）しっかりと結わえつけて、いつもの随身に持たせて、まだ夜明け前に（姫君の屋敷の）門の周辺をうろうろしていると、ほかならぬ昨日の女の子が走（って来）る。（それを見た少将は、）うれしくて、

「ほらこのとおり。（あなたを）騙し申し上げたりはしませんよ」

といって、懐からすてきな小箱を（取り出して、女童に）与えて、

「誰の（しわざ）とも知らせずに、（この洲浜を、供の者に）置かせて来てくださいな。そして、（私に）今日の（貝合の）成り行きもお見せくださいよ。そうすれば、（これからも）二度三度と（いい物を差し上げますよ）」

というと、（女童は）とても喜んで、ただ（一言）、

「前回の戸口（でしたら）、そこは（昨日にも）まして今日は人もいないのではないかしら」

と（だけ）いって、（屋敷の中に）入っ（て行っ）た。（そこで少将は、随身に命じて）洲浜を（西の対の）南の高欄（の上）に置かせて、（自身は、昨日の妻戸の所へと）潜入した。

そっと（室内を）見通しなさると、ちょうど同じ年ごろの女童たちが、二十人ほど着飾って、そそくさと格子を上げているのが見える。（すると、その中の一人が、）この洲浜を発見して、

「（まあ、）不思議だわ。（これはいったい）どなたのしわざでしょう。どなたのしわざでしょう」

というので、

「こんな（心憎い）ことをするはずの人もいません」「わかりました。（どうやら）この、昨日の（観音）仏様がなさった（ことの）ようです」「（ほんとうに）慈悲深くていらっしゃるわね」

と（皆で）喜び騒いでいる様子が、まったく尋常ではないので、（少将は、）たいそうおもしろくて、（じっと）座って

見ていらっしゃった、とかいう話だ。

【余説】

本作中において、少将の役割が〈好き者〉→〈方人〉→〈観音の化身〉と変化していき、最終的には、継子の姫君（たち）の〈亡き母〉に同化するに至る。『貝あはせ』をそのように読み解いてみたい。肝心な「貝あはせ」当日の様子が描かれないのは、その必要がないからである、もとより作者の計算である。それにしても、この早朝の無邪気な狂騒はどうだろう。「貝あはせ」が「甲斐あはせ」であることを象徴する見事な幕切れといえるのではあるまいか。